東大監督就任の井手氏　特別コーチ務める

都新宿で最後の指導、涙なきすがすがしい別れ

[2019 年 11 月 11 日 08:30]　スポニチアネックス

都新宿ナインと記念撮影におさまる井手峻氏（写真中央） Photo by スポニチ

野球界にとっての 11 月は、別れの季節でもある。

11 月 7 日。都新宿のグラウンドでも別れの時を迎えた球児たちがいた。2 年間の特別コーチを務めた OB で元中日球団代表の井手峻氏（75）が、来季から同様に古巣の東大を指揮することが決まり、最後の指導の日となった。

日が落ち、照明がグラウンドを照らす。井手氏の視線の先には、黙々と練習をこなすユニホーム姿の選手たち。その傍らで、続々と制服姿の引退した 3 年生や OB、父兄が集まってきた。練習後、グラウンド整備を終えると、マウンド付近で井手氏とナインが向き合う。別れを惜しむ言葉とともに、それぞれの手から花束や記念品が手渡されていく。涙はなく、すがすがしさが漂う。山口歩主将は「必ず甲子園に行きます」と力強い言葉で誓った。

まるで孫を見るような優しい目でその言葉に聞き入った井手氏は、両手いっぱいに贈り物を抱え「僕も向こう（東大）で頑張ります」と語りかけた。

お互いに感謝の言葉を尽くした後、田久保裕之監督が呼びかけると全員が肩を組んで円陣をつくり、おごそかに歌い始めた。「黎明の雲を破り　さしいづる日のごと　明けし生気充てり　我等六中健児…」。旧制第六中時代から歌い継がれる「健児の歌」が、大都会・東京のど真ん中で高らかに響く。15 歳から 70 代までが肩を寄せて歌う光景に、伝統校がつむいだ歴史を見た気がした。

「寂しいけれど、東大の監督が出ることは僕らにとっても大変光栄で名誉なこと」と田久保監督。誇りを分かち合い、それぞれの道を歩み出した。（記者コラム・松井　いつき）

東大新監督の井手峻氏　都新宿で最後の指導「東大でプレーする選手が出てくれたら」

[2019 年 11 月 7 日 18:21] スポニチアネックス

東大野球部の次期監督に決まった井手峻氏（75）が、コーチを務める母校・都新宿で最後の指導を行った。

最後はこだわりの併殺練習で締め、「勉強も野球も両立してよく頑張った。僕も向こう（東大）で頑張ります」とあいさつ。「新宿から東大でプレーする選手が出てくれたらうれしい」と話した。

現役選手や OB、父兄も集まってお別れのセレモニーを行い、花束や記念品を渡して別れを惜しんだ。山口歩主将（2 年）は「教えていただいたことを胸に、来年は必ず甲子園に出て良い報告をしたい」と謝辞を述べた。

田久保裕之監督も「侍みたいな人で本当にいろんなことを学ばせていただいた。どんな試合をしても良いところを見て褒めてくださって、教育者として指導してくださった。寂しい限りだが、我々のコーチが東大の監督になられるのはとても名誉なこと」と話し、感謝の言葉を尽くした。

元中日球団代表の井手氏　母校・東大の新監督に就任内定　連敗阻止へ期待

[2019 年 11 月 6 日 05:30]　スポニチアネックス

井手峻氏
Photo By スポニチ

東大野球部の次期監督に、元中日球団代表の井手峻氏（75）の就任が 5 日、内定した。この日行われた OB 総会で決まった。同大では初のプロ出身監督となる。13 年から指揮した浜田一志監督は今季限りで退任する。

井手氏は東大で投手としてリーグ戦通算 4 勝をマーク。66 年 2 次ドラフト 3 位で中日に入団し史上 2 人目の東大出身プロ選手となった。1 年目の 67 年にプロ初勝利を挙げたが通算 1 勝で 70 年に外野手に転向。76 年の現役引退後は中日 2 軍監督などを歴任。87 年からフロント入りし球団代表などを務めた。15 年に退任後、学生野球資格を回復し「いずれは東大で指導できたら」と話し、17 年から母校・都新宿のコーチなどを務めていた。17 年秋から続く連敗は 42 に伸び元プロの監督に連敗阻止が託される。

（ひと）井手峻さん　東大野球部初のプロ出身監督となった

2019 年 11 月 20 日 05 時 00 分　朝日新聞

井手峻さん

卒業から52年。かつてエースとして活躍した東京大学野球部の監督となり、16日から連日グラウンドに立つ。同期生の推薦を受けて決意した。「プロの世界で長年学んだことを還元できれば」と。

東京都立新宿高をへて東京六大学リーグ戦で4勝し、中日に入団した。東大から2人目、ドラフト制後では初のプロ選手だった。

10年間の選手生活でヒーローインタビューを2度受けた。初勝利を挙げた1967年9月の大洋戦と、外野手に転向後、延長十回に決勝本塁打を放った73年5月の巨人戦。「一番の思い出」だ。引退後にはコーチから球団代表まで、半世紀にわたりチームを支えた。

プロで試合を重ねるなかで痛感したのが学生時代の自身の甘さ。「東大選手は勝てば騒がれ、負けても善戦ならばよし、と納得してしまう」。3年生の春、慶大を完封し翌日は救援で連勝に貢献。4年春の慶大戦は九回1死まで無安打に抑えて完投勝ちした。「あれで満足せず、上を目指す強い気持ちがあればもっと勝てたし、記録も作れたかもしれない。選手にはそんな反省もこめて伝えたい」

「ノックなどは若い頃のようにはできない」と残念がるが、動きの軽快さは年齢を感じさせない。健康維持の秘訣（ひけつ）は「腹筋・背筋運動や腕立て伏せの継続」という。「自分にできることを全部はき出すまでは指導を続けたいですね」

（文・杉山圭子　写真・江口和貴）